西照

西照寺寺報「さいしょう」 第41号
2020年10月10日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座　00780-8-8185 西照寺
西照寺WEB　http://nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月　六日（金）午後二時（逮夜）～

七日（土）午前九時半（満日中）～

布教使　小島　信　師　射水市堀岡　聞光寺衆徒

※新型コロナを憂慮し今年度はお斎（御膳）はありません。
また、六日晩のお初夜はありません。ご留意ください。

西谷山　西照寺

正信偈のはなし　第十一話

譬如日光覆雲霧　雲霧之下明無闇
（たとへば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下あきらかにして闇なきがごとし）

獲信見敬大慶喜　即横超截五悪趣
（信を獲て見て敬ひ大きに慶喜すれば、すなはち横に五悪趣を超截す）

たとえば日光が雲や霧にさえぎられても、その下は明るくて闇がないのと同じである。信を得て大いによろこび 敬う人は、ただちに本願力によって迷いの世界のきずなが断ち切られる。

（中面に続く）

衆縁和合の存在

この世の様々な存在は、お互いにつながり、関わり合って共に大きな宇宙が一つであるような「いのち」を生きている。それが、私たちの「いのち」のありのままの真の事実であると、釈尊は気づかれました。

私たちは、これは自分の個別な命だと思っていますが、果たしてどうなのでしょうか。私の命の中身は、何十兆の細胞やら微生物やらウィルスやら、数多くの動植物の命を取り込んで、大自然の恵み、水やら空気や太陽やら、あらゆるものと一つにつながり、生かされ支えられながら成り立っています。その一つにつながっているということを仏教では、「如」（一つ）と表現しています。その「いのち」の大地・本源である「如」から、そのことに気づかせようと私のところに「来」てくださったはたらき、人格的表現を仏教では、「如来」と言っています。

そういう「如」と表現されるような「いのち」の大地があって、そこからいろいろな条件(衆縁)が整い、いろいろなものが依り集って(和合)、人やモノ・動植物等様々な形として仮に存在している。衆縁和合の存在である。永遠普遍な形として存在しているわけではありません。条件が変われば、違う形になっていく。生滅変化して、また、もとの「如」の本体にかえり、条件が整えば、また違う形になっていく。それが、「いのち」の真実です。ですから、どんな命の形であろうと、「如」という本体の個別的変形態であって、どれが良いとか悪いとかはありません。それぞれ百点満点の形です。

ところが、人間は、赤ちゃんの時はそうでもありませんが、だんだんとこれは自分の命であるという「自我」が生まれてきます。他と区別し「分別」するようになります。自分に都合の良いものと悪いものを分（分別）けて見る。そして、自分にとって都合の良いものに執着（我執）します。

私の命の基本的流れである「生・老・病・死」でいいますと、「如」の世界からするとどのような状態も百点満点の命です。しかし、「生、若い、健康、長生き」が自分にとって都合の良いこと、それが満たされたことが、幸せであり喜びであり安心であると執着します。その反対に「老い、病気、死」は、悪いこと、不幸なこと悲しいこと不安なこととして忌避し分別する。その延長に私たちの生活があります。学歴・職業・貧富・年齢・美醜……。これを評価という分別で見て、評価の上が良く、下が悪い。毎日分別に振り回されながら生活しています。ですが、私の分別執着したようにはなりまん。そこに煩悩を起こし、苦悩しているのが私たちです。

そういう私たちに、我執煩悩から解放され、いのちの本体である「如」の世界にこそ、本当の安らぎと真の幸せがあるとお釈迦さまは教えてくださいました。

死の体験旅行

人間が病院で死ぬようになってから死がダブーになってきたと言われています。第三人称といわれる「死」は毎日のように沢山テレビや新聞に流

れています。しかし、自らの死を突き付けられるような、身近な死に接する機会が段々少なくてきたように思います。死がタブーになって、触れない。受け止めることが出来なくなってきたということなのでしょうか。

ですが、人間は、必ず死にます。死ぬために生まれてきたようなものです。ですから、自らの死ということは、最も大切な問題なのに、なかなか自分の死に向き合うことができない。確かに、死は恐ろしく、不安なことだから考えたくない。でもそのネガティブな感情に向き合う中から、大切なことが見えてくるように思います。

死が怖くて恐ろしいということは、如何に自分が「いのち」の全体像を見失い、我執煩悩に振り回されているかの証拠です。そして、限られた命にどんな意味があるのか、だだ、我執煩悩に振り回されるだけの人生でよかったのか、自分の生きている意味を求めて、今日もがんばろうという力が湧いてきます。また、「やさしさの根本は死の自覚だ」と言われるように、回りにやさしくなれる。更には、他者への感謝の気持ちが湧いてきます。死期を迎えられた多くの方が、回りの人などから生かされ支えられている身に気づいて、感謝の心情を吐露（とろ）されています。

この感謝の気持ち、やさしさ、生きていく力は、人間が生きていくうえで最も大切にしなければならない心構えのように思います。しかし、死を自らのものとして考えさせられるような環境が希薄になるなか、うまく育たなくなってきているように思います。このことに、教育者である大学の先生方が慌てだしました。

今から二十年余り前くらいからになりましょうか。学生さんに対して、自らの死に向き合い、生きる意味を考えていこうという「死生学（しせいがく）」を専門に教える教授が目立ちはじめました。その授業の中で取り入れられている死の疑似体験授業は、今日「死の体験旅行」として、企業研修やさまざまなお寺などで取り入れられ、静かなブームになっていると聞いたことがあります。

この死生学の先駆的先生に。関西学院大学の藤井美和先生がおられます。死の疑似体験の授業がことに有名です。先ず、学生さんに今の自分にとって大切なものを紙に書かせる。藤井先生の場合は、「形のある大切なもの」「大切な活動」「大切な人」「形のない大切なもの」の四項目、各三枚ずつ計十二枚の紙に書く。他の先生の場合ですと項目も違い、枚数も二十枚とか二十五枚の方もおられます。

そこから、死の疑似体験がはじまるわけです。胃がちょっと痛くなったので、お医者さんに行って精密検査を受けた。すると癌（がん）であると言われた。ショックを受けて何枚が破り捨てる。これは手術をせねばならない。手術はしたが芳（かんば）しくない。ショックで何枚か破り捨てる。それから抗（こう）がん剤治療がはじまります。だんだん体も弱ってきてもうだめかと思う。

（裏面に続く）

（中面からの続き）ショックで何枚か破り捨てる。病状の悪化に伴い、その都度ショックで紙を破り捨てる。そして、最後の一枚だけ残し、それを持って目を閉じ「さようなら」の言葉とともに破って死んでいく、というような死の疑似体験の授業だそうです。他の先生もおおむね同じような授業です。

最後にどんなガード(紙)が残ったのか。本人は気づかないかもしれませんが、本人を一番底辺で支えていたものです。藤井先生は、形のあるものから破られていくと言われています。スマホとか、車とか、家などということなのでしょうか。そして、最後に残ったカードで一番多かったのが「お母さん」次に「愛」であったと報告されていました。他の先生の場合も「母」というカードがやはり一番多かったそうです。

この「お母さん」と「愛」というカードは、何をあらわしているのでしょうか。

それは、無条件の愛情ということだと思います。人間は一人で生きている者は誰もいません。あらゆる人やものとのつながりの中で、生かされ支えられてある命でした。つまり関係性の中で生きている。その関係が、相互に無条件に大切に思う関係性と、その繋がりの広さの中で、私の命は安心して成り立っていたということです。

それこそ仏様の心であり、それは「慈悲(じひ)の心」であると仏教では説いています。もとは、お母さんと子供の関係からきているようです。子供が困ったり悩んだりしているとお母さんは自分のことを犠牲(ぎせい)にしてでも、子どものために尽くしてくれる。でもそのことがお母さんの喜び、幸せであるような関係です。ですから、我執煩悩が私の命を支えているのではなくて、慈悲の心が支えていたということだと思います。

私たちは、我執煩悩が満たされるところに、幸せや喜びがあるように思っていますが、そうではなくて、「いのち」は、あらゆるものが一つにつながっているという関係性のなかにある。その関係する他者のために「慈悲の心」に生きるところにこそ、真の喜びと幸せがあり、私の生きる意味があると、釈尊は気づき教えてくださいました。

かといって、生涯我執煩悩の雲霧(うんむ)は消えない私たちです。しかし、常に「いのち」の大地からのはたらきはすでに届いているし、そのなかにいます。「如」の世界から私に分かるように、阿弥陀如来という人格的な姿としてあらわれ、その心を「すべてのものを救い仏にする」という本願と、その成就を南無阿弥陀仏に込めて私に届けてくださっています。その心に気づき目覚めされた(信心)ところに、我執煩悩が作り出している、天・人間・畜生・餓鬼(がき)・地獄という五悪趣(あくしゅ)という迷いの世界から解放され、私の真に生きる意味と道、救われていく世界が開けていく。そのようにこの正信偈の一段で、親鸞(しんらん)聖人は讃嘆(さんだん)してくださっているように思います。合掌

（文責　住職）